

慶州・チョクセン遺跡の発掘調査

— 日韓発掘調査交流2008 —

1 はじめに

奈良文化財研究所と大韓民国の国立慶州文化財研究所双方で2006年度に取り交わされた「日韓共同発掘調査交流協約」に基づき、2008年7月22日から9月19日までの60日間、筆者は慶州文化財研究所に滞在した。以下、滞在中に発掘調査に参加した四天王寺址、およびチョクセン遺跡の調査成果を紹介するが、なかでもチョクセン遺跡を中心に報告する。

2 四天王寺址の発掘調査

概要 四天王寺址は、文武王19年(679)に完成した統一新羅の護国寺院であり、慶州市街地から5kmほど東の低丘陵上に所在する。これまでも双塔式伽藍配置を有する寺院として知られていたが、2006年から国立慶州文化財研究所により伽藍全体の発掘調査が実施されており、金堂址・東西両木塔址・回廊址・軒廊址・灯籠などが確認されている。調査面積は12,840㎡である。

東木塔址・西木塔址の発掘調査 今回、東木塔址基壇部の発掘調査に参加した。基壇東半分は残存状況が良好で、磚積化粧の状況が西木塔址以上に明瞭であった。具体的には、地覆石上に隅柱と束柱を設置し、その間に長方形塼を最低3段にわたって積み重ね、各面中央に取り付く階段脇に四天王像塼を配する¹⁾。一方の西半分は、基壇化粧の残存状態が良好とはいえないが、地覆石の抜取痕跡や階段部が検出された。基壇外周に西木塔址と同じく犬走り(塔区)を設ける。

西木塔址基壇構造の解明のため、トレンチによる断面割り調査の結果、西木塔址の基壇は掘込地業を有し、掘込地業底部から基壇頂にいたるまで10回以上にわたり大型の割石と砂質土を互層に積み重ねたことが判明した。なお、基壇に版築技法は用いられていない。東木塔においても、基壇残存部で大型の割石が露出しているため、同様な築造方法が用いられた可能性がある。また、西木塔址では、基壇造成後に礎石位置を掘り下げ、底部に根石を敷設した後に、礎石および心礎を据えていた。

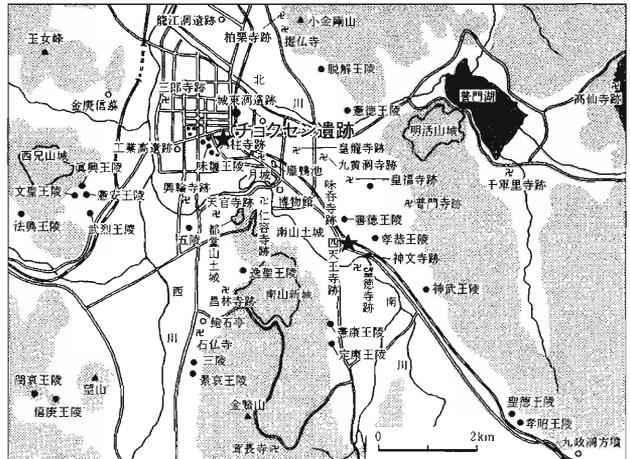


図30 チョクセン遺跡・四天王寺址の位置

(中尾 芳治ほか『古代日本と朝鮮の山城』2007より佐藤興治作図を一部改)

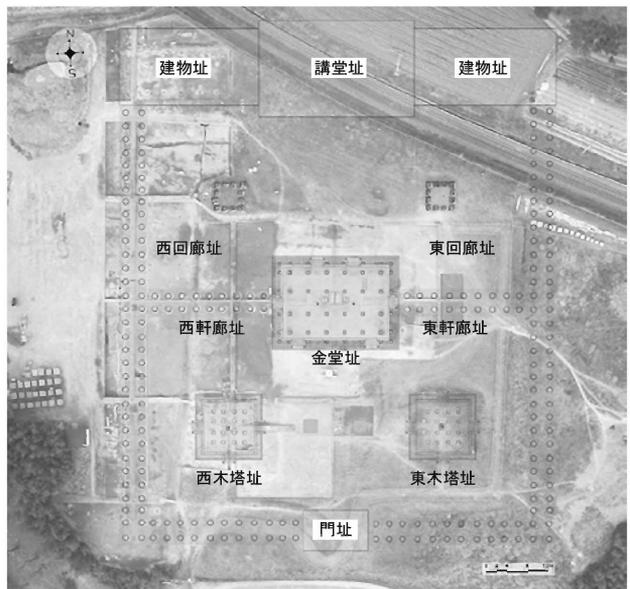


図31 四天王寺址伽藍配置

3 チョクセン遺跡の発掘調査

概要 チョクセン遺跡は、国指定史跡である慶州市皇南洞・皇吾洞・仁旺洞の各古墳群一帯545,000㎡(約165,000坪)の中央部に所在する4世紀から6世紀にかけて造営された新羅古墳群である。面積は384,000㎡、2007年3月20日から発掘調査が開始された。これまでチョクセン遺跡は、すでに史跡整備された地点から外れていたため、間歇的に遺跡の破壊が進行し、その都度緊急調査が実施されてきたが、今回は一帯の史跡整備にともなう本格的な学術調査として、遺跡全域を5次25年にわたって発掘調査する計画である。今回の大規模な発掘調査により、新羅古墳群の本格的な構造的解明が期待される。



図32 チョクセン遺跡B1・2・3号の全景

B地区の新羅古墳 2007年～2008年調査地点は大陵苑の東側に隣接し、A・B・C・Dの4地区に分かれる。各調査区では積石木槨墓・石槨墓・甕棺墓が多数確認されている。各種墳墓の構成をみると、大型の墳丘を有し、単葬の積石木槨墓の近隣に、積石木槨墓が群集して一つの墳丘をなす墳丘径10m強の古墳が造営され、さらに石槨墓や甕棺墓が周囲に点在する。

具体的にみると、B地区では中心的な古墳である53号墳、それより墳丘規模がやや小規模の甲塚・乙塚からなる54号墳という2基の積石木槨墓を中心に古墳が展開し、これまでに積石木槨墓48基、石槨墓3基、甕棺墓9基が確認されている²⁾。なお、54号墳は1934年5月に有光教一氏によって発掘調査が実施されている³⁾。

前述の通り、54号墳の西に位置するB2号は、B1号・B2号・B3号・B6号と呼ばれる複数の積石木槨墓が近接して築かれたものの1基であり、これら積石木槨墓群の周囲を護石で囲い、ひとつの墳丘とする。こうした墓制は、三国時代の竖穴系埋葬施設にしばしば見受けられる。同一墳丘内で比較すると、B1号が副葬品の質量ともに最も豊富であり、B2号ではB1号を簡略化したといえる様相を示し、具体的には、主槨では三葉環頭大刀、環頭大刀、金銅製耳環、陶質土器など、副槨では陶質土器や馬具類などが出土している。ちなみにB1号では、これ以外に金製耳飾、首飾、銀製帯金具などが含まれ、材質面や種類の豊富さからみてワンランク上の副葬品組成を示しているといえる。

44号墳 本墳については、墳丘の一部が残存しているため、墳丘部を確認するためのトレンチ調査を実施した。

墳丘中央部から西側は宅地によって墳丘が破壊されており、また崖状に切り崩された宅地隣接部には宅地造成時の石垣が構築されるなど、残存状況は決して良好ではない。表土除去後、すぐに残存する墳丘部の上面で礫が密にみとめられたが、筆者の参加期間中は、これが積石木槨墓の積石部かどうか断定するまでには至らなかった。

4 まとめ

四天王寺址は、東木塔址の基壇化粧が良好に残されており、西木塔址基壇では明確でなかった磚の積み重ね方や配列方法などの基壇化粧の詳細が判明した点、さらに掘込地業をもつことなど、西木塔址基壇の築造方法が判明したことなどが調査成果として特記される。

チョクセン遺跡は、墳丘規模が20mを超える大型の積石木槨墓、10m前後の小規模な墳丘を有する群集する積石木槨墓、さらにその周囲を石槨墓および甕棺墓がとりまく。この分布状況からみて、新羅古墳が階層性をもって築造されたことが推察される。さらに既に指摘したとおり、積石木槨墓のなかでも副葬品の質量に違いが認められ、この点からも明確な階層性の存在を容易に察することができる。このことから、新羅古墳は日本の古墳に比して厳然とした階差があったことがうかがえる。

このようにチョクセン遺跡は、階層分化を知る上で、また三国時代新羅の王権構造を理解する上でも欠かせない重要な遺跡と位置づけられる。新羅古墳群を把握するために欠かせない事例として、重要な位置を占めることが予想されるチョクセン遺跡は、発掘調査の進捗に伴い、調査成果のさらなる進展が期待される。

また日韓双方が、発掘調査交流を通じて継続的に発掘調査における情報や成果を共有し、密に連携していくことにより、一層の研究の発展が見込まれる。(青木 敬)

注

- 1) 国立慶州文化財研究所四天王寺址発掘調査団「大韓民国慶州四天王寺址」『考古学研究』55-2、2008。
- 2) 国立慶州文化財研究所「慶州チョクセン遺跡発掘調査」諮問委員会資料、2008。
- 3) 有光教一『古蹟調査概報 慶州古墳 昭和8年度』朝鮮総督府、1934。